**Chapter 1**

**月光の谷の影**

**章：珍しい正統派の英雄、お姫様、そして暴君 Pt.1**

ヴェイルの空気は、灰と沈黙で満ちていた。

**エーフィ**は黒曜石の蔓でできた檻の中に動かず横たわり、首に巻かれた抑制バンドのせいでそのサイコパワーはかすかに揺れているだけだった。廃れた神殿の片隅には月光さえ届かず、**バンギラス**はまるで玉座を奪われた王のように歩き回っていた。

「感謝するべきだぞ。」と、彼は砂利が擦れるような声で唸った。「選ばれることを懇願する者も多いんだ。だが——俺は、今のところは我慢してやる。」

**エーフィ**は微動だにせず、その視線を彼に向けた。「**ブラッキー**は私を見つけるわ。」疲れ切った声で、彼女はささやいた。「そして、彼が来たら——」

**バンギラス**の笑いが、神殿の石を揺らした。

－－－

遥か離れた崖の上で、**ブラッキー**は砕けた断崖に立ち、長時間たどってきた匂いの痕跡を目を細めて追っていた。その体のリング模様が怒りに反応してかすかに光っていた。隣では、**ピカチュウ**がまばたきをしながら、退屈そうに、そしてやや苛立たしげに見ていた。

「これのために俺を引きずり出したのかよ？」と**ピカチュウ**はつぶやいた。「今夜は予定があったんだぞ。呪われた土地でお前の恋愛ドラマを追いかける予定じゃなかった。」

**ブラッキー**は彼の方を見ずに言った。「僕に借りがあったよな？」

**ピカチュウ**はうめいた。「借りがあったのは認める。でもそれ、死ぬ覚悟のことじゃねぇからな。」